

JRAパート1国昇格による非居住外国人馬主認可の影響による国内生産者及び馬主の生き残

The survival of Japanese thoroughbred bleeders and owners live in Japan and a problem of the internationalization in the future.

1K05B059

片山 智順

指導教員

主査 木村和彦先生

副査 原田尚幸先生

緒言

JRAは国際パート?国昇格という念願を達成した。そして、ついに日本でも非居住外国人馬主が認められるようになった。日本競馬界がレベルアップするにつれて日本産馬の海外G?制覇も珍しいことではなくなり、海外からの開国要請も強く鎖国は続けることが出来なくなったことも原因である。1981年に日本では「強い馬づくり」の一環としてジャパンカップというレースが創設されて以来、日本の競馬は外国の馬に追いつけとばかりに馬のレベルアップを測ってきた。時代は変わり今では日本の馬のレベルは世界に馬と比べても遜色ないところまできたが、日本の馬が強くなったためにジャパンカップに外国馬が来ない事態になっている。ジャパンカップ以外の国際レースとして認定されているレースも同じである。このままでは日本の馬の成長はとまってしまい衰退してしまうかもしれない。開国により国内生産者及び馬主の利益が減少すると考えられるが、国際化と共に日本競馬界が発展していく手立てを模索する時期がやってきた。国際化をキーワードに今後展開する日本競馬界において、JRAパート?国というブランドを活かし、もう一度生産者、馬主を始めとする競馬関係者の活気を取り戻し発展していくにはどうすればいいのかを考え。

研究方法

本研究では今日の競馬の現状に対する文献購読とともに、各生産者、日本中央競馬会、日本軽種馬登録協会、日本軽種馬協会、及び監督

省庁である農林水産省等のデータを参照することで、一般化可能な課題と欠陥の明示と、その原因を検証し、国内生産者及び馬主の生き残りの可否と今後の日本競馬界の進むべき方向性を考察する。

現状と問題

JRAは国際化の波に押され2007年に「国際セリ名簿基準におけるパート1国」に昇格した。これによりセリ名簿の国際基準に順ずる表記を求められることや、国内グレード競争の表記を国際基準に変更することを義務付けられる。もちろん日本競馬界が世界のトップレベルと認められたことは賞賛すべきことである。もっとも重要なことはセリやグレードの表記の変更ではなく、国際パート1国に昇格したことによる日本競馬の開国を余儀なくされることである。2008年11月18日にJRAより「平成21年より日本国内に居住していない本邦外居住者について、馬主登録を行うことを決定した」と発表された。非居住外国人馬主を認めるにより国内生産者及び馬主の収入が激減すると考えられている中での決定であり、生産者との折り合いがつかないうちでの決定から、更なるJRAと生産者の関係が悪化しかねない。今後の国内生産者への対応、非居住外国人馬主の認可基準と彼らの所有する競走馬に対する賞金や生産者賞などの付加賞に関して、明確なルール作りは行われていないのが現状である。

考察

日本競馬の開放に伴い今まで保護されてきた生産者及び馬主が今後どうなってしまうのかは分からない。不景気のために廃業に追い込まれる事例が多くなってきた。非居住外国人馬主は所有する馬の5頭のうち4頭が国内産馬でなくてはならない。外国人が日本で馬を購入し、国内生産者が潤うようなルールと思われるが決してそうではない。非居住外国人馬主の潤沢な資金で国内生産者買収が加速し、国内生産者の利益が

更に減少する可能性が見えてきた。非居住外国人馬主の国内生産に関するルールと生産者賞についてのルール作りが出来ていなければ今後、国内生産者は更に淘汰されることになる。外国資本の流入で畜産からサラブレッドビジネスへの転換が推し進められる可能性もある。この現状に非居住外国人馬主認可で日本競馬界を活性化させる良いきっかけとするために、JRAと生産者及び馬主関係者の協力が不可欠である。